

黒川温泉における雑木植栽による修景の展開過程とその技法

Trajectory of landscape improvements with deciduous trees and its techniques in the Kurokawa Spa Area

寺島 健* 山口 敬太* 川崎 雅史*

Ken TERASHIMA Keita YAMAGUCHI Masashi KAWASAKI

Abstract: In Japan, various landscaping method has been used by local communities on the development of the area. Planting a variety of trees in an arrangement similar to a natural mountain village is the main approach to making improvements of landscape in the Kurokawa Spa Area. This type of planting has successfully revitalized this area. This thesis aims at revealing the procedure of landscape improvements and its consensus-building in the Kurokawa Spa Area. The hotel association of Kurokawa has planted miscellaneous trees in public spaces of the Kurokawa Spa Area by using the revenue of spa coupon tickets since 1986. Prefectural and national government also supported the project of planting trees and making rules of landscaping since 1995. This thesis also aims at revealing the landscaping methods by reviewing literature, analyzing measurement surveys, and conducting interviews. The trees in the target area are photographed and shown in ground plans. By analyzing the images, the landscaping methods can be clarified. As a result, five kinds of planting techniques can be confirmed as Connection, Eye Stop, Covering, Up and Down Combination, and Inequilateral Triangle Planting.

Keywords: *landscape planning, landscape design, urban greening, roadside planting, local governance*

キーワード: 風景づくり, 景観デザイン, 都市緑化, 街路樹植栽, ローカル・ガバナンス

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年、日本各地において雑木による庭造りや修景が行われ、数多くの一般書も出版されている。一方、雑木の植栽による公共空間の修景や緑の風景づくりは、社会的にも技術的にも未だ発展途上の段階にある。そうしたなか、1986年以降、現在に至るまで毎年、の植樹により修景事業を進めてきた黒川温泉（熊本県阿蘇郡南小国町）の取り組みからは、その仕組みと技術の両面で学ぶべき点が多い。そこで本研究は、黒川温泉における修景の展開過程と、雑木植栽による修景の技法について明らかにすることを目的とする。

雑木の庭造りについては、近代における武蔵野の雑木林の美の発見から論じたもの¹⁾、近代別荘地における自然風の庭づくりから論じたもの^{2),3)}、上原敬二の評価を論じたもの⁴⁾、飯田十基の活動との関わりから論じたもの^{5),6)}などさまざまな知見の蓄積があり、雑木による庭造りの技術は広く確立されている。一方で、雑木植栽による街並み景観形成上の技法に着目した研究は少ない。なお、先行研究では「雑木」を、コナラ (*Quercus serrata*)、クヌギ (*Quercus acutissima*)、エゴノキ (*Styrax japonica*)、ヤマボウシ (*Cornus kousa*) などの落葉樹の意味で用いており、本研究でも同様の意味で用いた。

街路樹や接道部に着目した景観形成や植栽技術に関しては、心理評価の観点からの研究⁷⁾、緑量感や開放性の観点からの研究⁸⁾、植栽の種類や組み合わせなどの研究^{9),10)}、風致宅地の接道部デザインに関する研究^{11),12)}などの知見の蓄積があるが、黒川温泉のように、沿道空間、駐車場、敷地の境界、路地、旅館のアプローチなど、民有地と道路などの公共空間の両方において、街全体で雑木植栽による景観形成を進めている事例の研究は管見の限りではない。黒川温泉は、雑木植栽による街並み景観の形成（図-1）という点で特徴的な事例であるが、それに加えてこれらの雑木植栽の植樹を、黒川温泉観光旅館協同組合（以降、旅館組合）が出資して行うという仕組みの点でも特徴的であり、修景の展開過程においては

仕組みの点にも着目して明らかにする。

黒川温泉の温泉地経営に関しては、旅館組合による温泉地経営や旅館経営に着目した図書や雑誌記事が数多く刊行されており^{13),14)}、いくつかは組合幹部や先導したリーダーへのインタビューを含む。本研究はこれらの成果をふまえて、風景づくりに着目した新たな文献資料調査やヒアリング調査、沿道を中心とする現地での植栽位置の調査や視覚的な見えの分析に基づき、修景の経緯と景観形成上の技術的方法について明らかにする。

(2) 研究の方法

黒川温泉における植樹活動の経緯を把握するために、文献資料調査と関係者へのヒアリング調査を行った。文献資料調査は、既刊の資料^{15),16),17)}の修景に関わる情報を整理した上で、旅館組合等が刊行した報告書類^{18),19)}、関係者が所有する写真資料等を用いて分析を進めた。さらに文献では明らかにされていない雑木の配植や修景上の意図や工夫、修景事業の経緯や各時点での課題、合意形成の過程を明らかにするため、長年植樹活動を継続的に進めてきた後藤健吾氏（以降、健吾氏）、穴井信介氏、松崎郁洋氏、徳永哲氏にヒアリング調査を実施した²⁰⁾。また、本稿の事実に関する内容についてはヒアリング調査協力者へ確認を行った。加えて、樹木の配置、樹高、樹種などの現地調査を2016年10月19-22日に行った。一眼レフデジタルカメラ（Pentax K-5）を用いて対象とする沿道の写真を2855枚撮影し、合わせて目視で樹木の配置を観察し、その場で250分の1スケールの平面図上に描画して記録した。写真撮影による記録は、街路沿いに3m程度の間隔で行うとともに、樹高、葉の広がり、樹幹の太さ、樹種等の植栽の状況を近距離で詳細に記録した。現地での記録に写真の情報から補完して、平面図上に樹木の外形を描画した。その際、近距離での記録が出来なかった敷地内部の植栽については、現地での目視による把握に加えて、航空写真の情報（Google Earth Pro）によって補完した。これらの調査データに基づいて、雑木植栽による景観形成の技術的方法について考察を行った。

*京都大学大学院工学研究科



図一 修景前後比較 (写真は徳永哲氏提供)

2. 雑木植栽による修景の展開過程

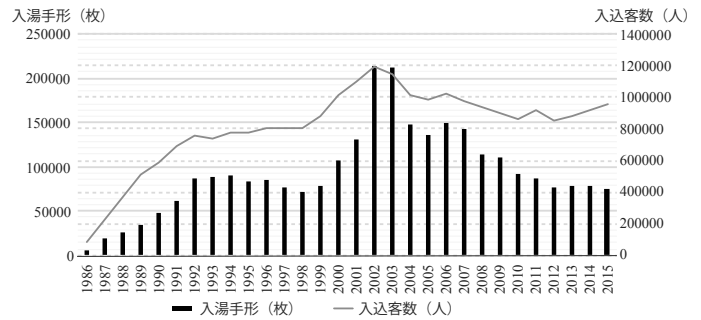
(1) 雑木植栽による修景の経緯：1980-90年代

江戸中期には宿屋が存在していた歴史を持つ黒川温泉は、昭和後期に至るまで、観光の対象としては知名度の低い無名の温泉地であった。1964年のやまなみハイウェイの開通により別府方面からのアクセスが改善し、一時は観光客数が伸びたが、続かなかった。旅館経営の改善のため、郷土種の雑木を用いた修景を始めたのが新明館三代目館主の後藤哲也氏 (以降、哲也氏) である。哲也氏は「田舎の雰囲気づくり²¹⁾」の重要性を意識し、都会からの訪問者が心を癒すためには自然あふれた景観が必要であると考え、露天風呂の周囲に雑木を植樹した。哲也氏は、長野県軽井沢の自然の豊かさに惹かれたのをきっかけに、落葉樹を中心とした雑木の植樹による修景という発想に至り、修景を進めた²²⁾。その結果、黒川で新明館だけが客足が途絶えない状況が生まれ、これに触発されたいこい旅館経営者の井和男氏が1983年に哲也氏の指導を受け、新たな露天風呂をつくり、それが成功した。その後、黒川温泉全体で二人に倣うように露天風呂の設営が進んだ。

黒川は温泉地としての個性の弱さが課題であったため、他地域の外湯めぐりの成功例を参考に、「露天風呂の黒川温泉」としての活性化を目指した²³⁾。しかし、立地条件から露天風呂の敷地確保が不可能な旅館が存在したことから、旅館組合は旅館間の隔たりをなくし、すべての露天風呂を黒川温泉全体の共有財産として活用する方策を定めて、1986年に入湯手形²⁴⁾の販売へと至った。また、同年に旅館組合の組織を再編し、青年部の発案で看板班、環境班、企画広報班を組織し、その班長に30代の若手を任命した。これらを契機として、旅館組合の事業として雑木の植樹を開始した。このとき、1950年代半ばの「拡大造林」の影響から、黒川温泉地区にはスギ林とわずかな桜しかなかった²⁵⁾。

1986年の最初の植樹事業の対象は温泉公園で、次が旅館組合の駐車場であった。哲也氏、健吾氏が中心となり農家から雑木を買い取り樹種の選定を行い、黒川温泉内で見栄えが良くないと感じた場所を中心に植樹を実施した。植樹開始直後は、ツツジ (*Rhododendron*) やサクラ (*Prunus*) など華やかな花の咲く鑑賞用の樹木を植樹することを希望する意見が多かったが、哲也氏は雑木林に生えているような雑多な樹木の四季による多様性に価値を見出し、周囲を説得しつつ積極的に雑木を配置した。

植樹開始後3年間の資金として、熊本県による緑化支援事業「くまもと緑の3倍増計画」により、1986年から1988年までに200



図二 入湯手形売上枚数と入込客数の推移

万円ずつ計600万円の補助金を得た。開始3年間は入湯手形の売上が少なく植樹事業の立ち上げに大いに役立った。入湯手形の売上は4年目から徐々に増え、これを植樹の予算に充てた。入湯手形売り上げ・推定入込客数推移 (図-2²⁶⁾) からは、1986年の入湯手形の売り上げが約6千枚に対し、2002年で約21万枚に到達し、その後は7-8万枚程度で推移していることが分かる。2002年には最多で合計一千万円分の雑木を植樹した²⁷⁾。入湯手形の収益による植樹は毎年続けられ、各旅館の敷地においても、駐車場やアプローチなどの沿道で雑木の植樹が進められた。その際には哲也氏や健吾氏などの旅館組合のメンバーが技術的方法を助言した。

また、旅館組合は、個人看板の撤去と共同看板の設置 (1987年)、街路灯の設置 (1988年)、芝張り・草箱設置 (1991年)、ガードレールの塗装 (1997年) などの修景事業を展開した。これらにより地域の景観は大きく変化した。

(2) 公共空間の修景の展開：2000年代以降

黒川温泉の修景は、2001-11年の街なみ環境整備事業 (国土交通省) の活用により、さらに進展した。最初に進められたのがまちづくり協定の締結 (2001年) である。まずは、それまでに自主的に形成されてきた景観形成上の暗黙の了解を、あらためて相互に確認する形で「風景づくりの三原則²⁸⁾」を定めた。三原則とはすなわち、一) 郷土の雑木と親しみやすいスケール尺度により「なつかしさ」を演出する。二) 傾斜地の特徴を活かし、地域の暮らしぶりが感じられる空間を大切にする。三) 木材や土、漆喰などの天然素材をいかして、素朴な質感の建物、和やかなまちなみを形成する。である。

また、まちづくり協定の締結にあたり景観形成のルール²⁹⁾を定めた。植栽に関する協定の内容としては、「郷土の自然に適した樹木や草花による修景、緑化に努める」、「道路際は、樹木や生垣により緑化を図る」、建物は「自然景観に配慮した小振りな建物とし、主な構造はできるだけ木造とする」、工作物は「柵、塀、擁壁は出来るだけ低くし、修景、緑化に努める。ブロック塀は設置しない」などを定めた。この運営のために、まちづくり協議会と協定運営委員会が発足し、住宅や旅館などの改築や修景の機会に応じて、外壁の素材や色、工法など技術的な部分についてランドスケープアーキテクトの徳永哲氏をはじめとした専門家を交えて協議を重ね、環境づくりを進めた。協定はそれまで進められてきた黒川の景観づくりの方法を明文化したものであったため、協定の締結に関して大きな抵抗や反対意見はなかったという³⁰⁾。

同事業により、多目的施設「べっちゃん館」の建設、丸鈴橋架け替え、川端通りの改修整備 (2003年)、「辻の厠」整備 (2004年)、いご坂、柿の木坂の改修整備 (2006年)、街路灯の設置、さくら通りの改修整備 (2007年) が進められた。露天風呂めぐりルート上の街路においては、人造石や自然石を用いた舗装の高質化や生垣等の植栽、側溝の蓋の切石張り仕上げ、神社への参道整備、四阿の整備が実施された。これらの事業計画は旅館組合と徳永哲氏とが協議を行いながら進められた。

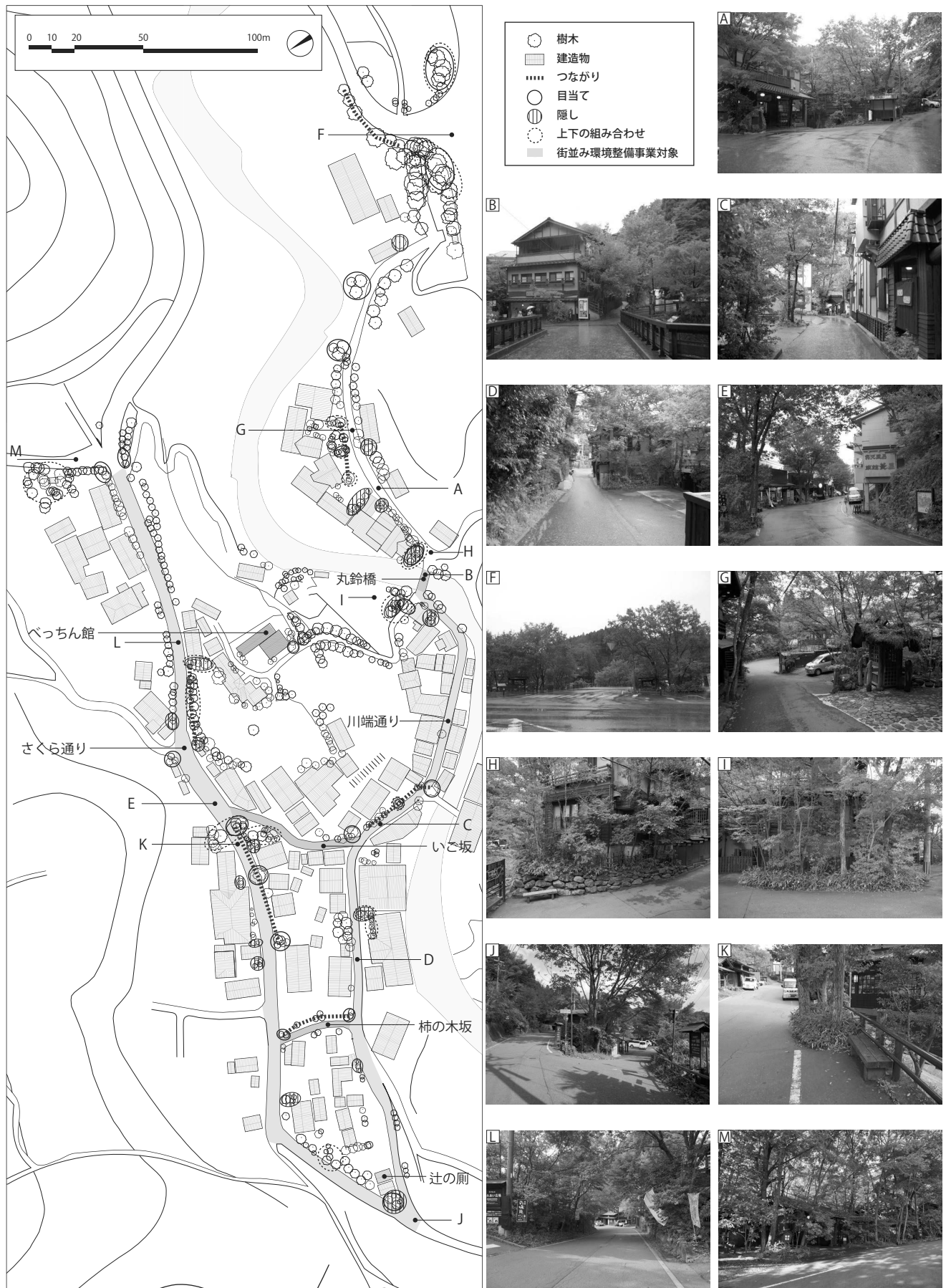


図-3 黒川温泉植栽配置図 及び A-M 地点写真

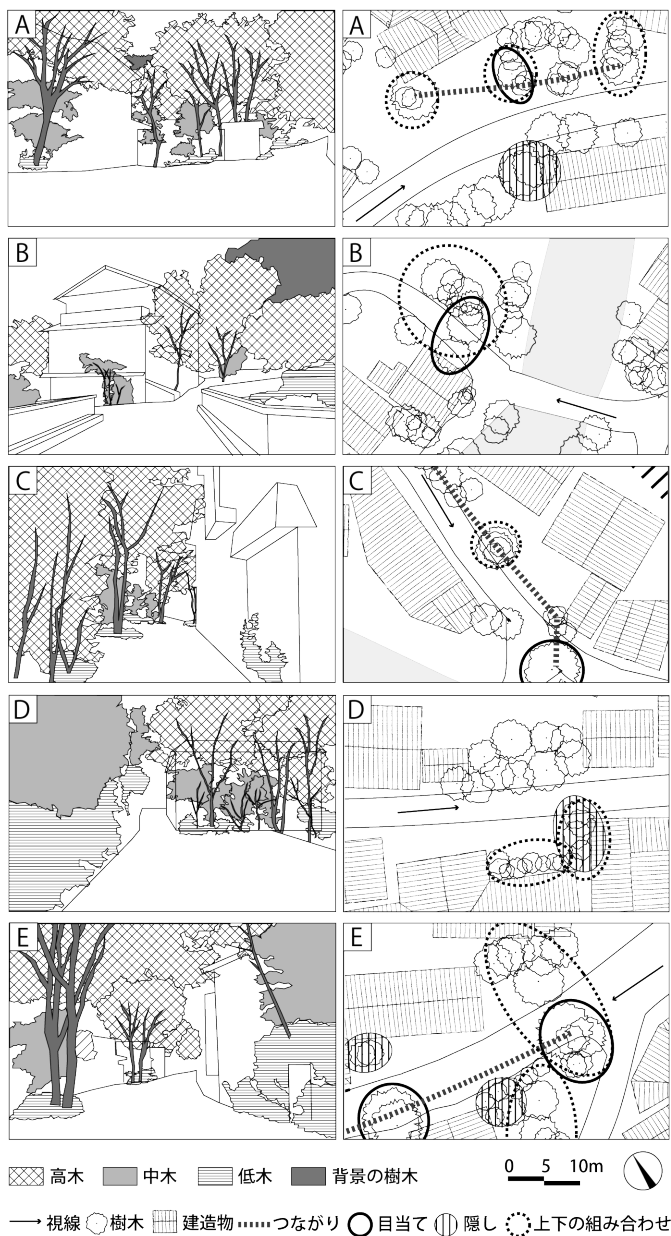


図-4 植栽分析図

(3) 修景事業の合意形成

旅館組合を中心とする修景事業の合意形成に関しては、植樹以上に維持管理について容易ではなかったという。「最初は批判がかなりあり(中略)葉っぱが雨樋に詰まるとか、落ち葉の掃除が大変とか、それに駐車場が狭くなるといわれた³¹⁾」(健吾氏)というように、事業当初は、掃除による落ち葉の管理などの理由から反対意見が少なくなかった。そのため1989年から2015年にかけて、旅館組合が住民を説得し、共同作業としての草刈りや落ち葉拾いなどの景観管理を進め、景観形成に関わる意識の共有を図ってきた³²⁾。

黒川温泉では哲也氏が修景の監督者となって、その技術が他の旅館経営者にも教授されて伝えられ、また、露天風呂を外湯めぐりに関して共有するという取り組みの結果、黒川温泉全体で旅館・まちが活性化するという成功体験を得た。山間の黒川温泉において、田舎の雰囲気をもつ「雑木」による修景が、温泉地の魅力向上と集客につながり、それが組合員にも実感されることによって、継続的な取り組みが可能となった。

また、本来、旅館同士は経営面では競合相手であるが、このよう

な「共有」の理念に基づく活動の経験が共同体的一体感を醸成し、地域の目標像の共有や意識の統一に有効にはたらいと考えられる。こうした黒川温泉の取り組みは、ひとつひとつの旅館を「部屋」に、道を「廊下」に見立て、全体が一つの旅館のような「黒川一旅館」というコンセプトで表現されている³³⁾。

組合が十分かつ継続的な自主財源を持ち、修景技術を持ったリーダーと、実行する主体(組合員)がいたこと、黒川温泉全体で活動を行うことで一体感が生まれたこと、さらには植樹の効果がすぐに実感できたことが、継続的な修景事業を可能としたといえる。

3. 雑木を活用した修景技法の特徴

(1) 雑木の選定・植樹方法

黒川温泉では旅館組合の構成員が自ら植樹を行ってきた。植樹されてきた雑木は、高木は主にコナラ、クスギが中心であり、中木はヤマモミジ (*Acer palmatum* var. *mastumurae*)、エゴノキ、ヤマボウシ、低木はムラサキシキブ (*Callicarpa japonica*)、ガマズミ (*Viburnum dilatatum*) などの落葉樹である。また、冬場のアクセントとしてツバキ (*Camellia japonica*)、シャクナゲ (*Rhododendron*)、アセビ (*Pieris japonica*) などの常緑樹も用いられてきた。四季を感じられるような樹木が本地域の特徴となり、旅館組合は1950年代まで周辺地域に自生していたような雑木を再び街なか植えることを目標としてきた。哲也氏が「いろんな木が混じりつるから雑木林は柔らかい雰囲気を醸し出す³⁴⁾」というように、雑木によるやわらかい雰囲気こそが黒川の目指したものであった。

樹木の入手方法として、哲也氏は後継者である健吾氏とともに造園屋に行き、苗木ではなく生長した成木を、一本一本吟味して購入していた。植樹場所の選定時には、詳細な図面を用いず、その樹木の枝・葉を見ながら植える場所をその都度決めており、その作業を先導して周囲に指示を出していたのが哲也氏であった。哲也氏は都市部の街路樹は等間隔に植えるが、自然景観を財産として保持すべき田舎では、街路樹を等間隔に植えるべきでない、と考えた³⁵⁾。加えて雑木の植樹においては、その配置が自然的でない意味をなさないと考え、黒川温泉では樹種よりも植栽の配置に重きが置かれた。自然な配置というのは容易ではなく、経験に裏打ちされたものであるという。たとえば、「不等辺三角形で結んだりちょっと空けたりしている。根を寄せて植えるとか³⁶⁾」(健吾氏)という発言にみるように、樹幹を不等辺三角形の組み合わせで配置することで、樹木が視点場の変化によってさまざまな表情を見せることが意図されており、造園の基本的技術が意識的に活用されていることを確認した。

(2) 景観形成上の特徴に関する考察

黒川温泉の植栽は、庭だけにとどまらず、道路沿いや駐車場、建物の隙間に植樹が行われたことにより、観光客が街の沿道のどこを歩いていても豊かな緑を感じることができる点が特筆できる。また、特有の枝振りや葉の付き方をもつ植栽の配置により、前景と背景の重なりが生まれて眺めに奥行きが生まれたり、上下の重なりにより立体感が生まれたり、視点の動きによって眺めがさまざまに変化する、といった景観形成上の特徴が認められる。

そこで、現地調査及び図面調査に基づき、黒川温泉における雑木植栽の景観形成上の技法の特色について考察する。聞き取りと現地調査により、5つの特徴的な景観を構成する技法を仮説的に見出した。そこでこれらの技法を定義し、それが黒川温泉のどの地点で確認できたかを整理して(図-3³⁷⁾)、その典型的な地点(A-M)を明示し、なかでもこれらの特徴が顕著に認められる地点(A-E)については植栽の配置図を示した(図-4)。考察にあたっては、A-Eに関して高木・中木・低木と背景との関係に着目し分析したものを図-4に、A-Mの分析結果を表-1にまとめた。

表-1 各地点で確認できた技法とその特徴

地点	つながり	目当て	隠し	上下の組み合わせ	植栽の景観形成上の特徴
A	○	○	○	○	旅館のアプローチかつ駐車場である空地に植栽配置し、緑量豊かで連続的な緑景観を形成。
B		○		○	温泉街の主要動線上にあり、目当てとなる高木がシンボリックな緑景観を形成し、かつ建物を隠す。
C	○	○		○	街路沿いの空地に連続的に樹木が配置され、目当てとなる樹木とともに連続的な緑景観を形成。
D			○	○	旅館横の駐車場の外縁部に上下の高さの異なる樹木を組み合わせることで建物の壁面を隠す。
E	○	○	○	○	カーブする道路の外側、動く視線の正面に高木が配置され、連続的でシンボリックな緑景観を形成。
F	○	○		○	温泉街の玄関口となる交差点の両側に高木が配置され、ゲートのような印象的な景観を形成。
G	○			○	旅館の空地に連続的かつ立体的に植栽が配置され、緑量豊かで連続的な緑景観を形成。
H		○	○	○	高さの低い雑木を配置し、通りに面した旅館の壁面を隠すとともに、立体的な緑景観を形成。
I		○	○	○	駐車場脇に上下の高さの異なる植栽が配置され、面積は小さいが立体的で効果的な緑景観を形成。
J		○	○		三叉路の角地に高木が配置され、遠くからみても目立つシンボリックな景観を形成。
K		○			道路の隅のわずかな隙間を活用し、低木植栽と高木が配置され、きめ細やかに景観を形成。
L	○			○	道路沿いに枝ぶりの大きな高木が多数並び、樹木によるトンネルのような景観を形成。
M				○	旅館のアプローチに多数の低・中・高木が配置され、透かしにより広がりある立体的な緑景観を形成。

なお、本稿では樹高5m以上の樹木を高木、樹高3-5mの樹木を中木、3m以下の樹木を低木とした。以下に景観を構成する5つの技術的方法に関して考察を行う。

1) つながり

道路に沿って連続的に植栽が配置されることで、視界の中で複数の樹木がつながって見えるとともに、樹木の見えに奥行きが生じる。平面図上で樹木が連続していないにもかかわらず、視覚的に連続している「つながり」は、地点A, C, E, F, G, Lなどでみられる。直線道路やゆるやかにカーブしている道路の外縁に植栽が配置されており、沿道に30-60m程度の長さで緑のつながりがつくられている地点が少なくとも6地点ある。聞き取りでは、「つながるっていう発想でやってきた。緑が有機的につながる風景ですね³⁸⁾」(健吾氏)と、樹木の視覚的な連続性は意識的に創出されてきたものであることが確認できた。そこでは、沿道に植栽を配置するだけでなく、民有地、駐車場、建物の隙間、看板脇など敷地内の様々な空地に植樹を行うことで、連続的な緑景観を形成している。

2) 目当て

カーブや角地などで歩行者の進行方向正面、視線の突き当たりを高木の植栽が配置されることで、植栽が無意識的に通行者の目に留まり、樹木を大きく印象付ける。地点A, B, C, E, F, H-Kなどでみられるように、樹木がアイストップとなり、緑の印象が強まっている。その効果を発揮するためには高木で、葉を大きく広げ目に留まりやすいコナラなどが有効である。また、角地などのわずかなスペースでも植樹できるため、位置を選べば効率よく強い印象を与えることが可能である。黒川温泉街では道路のカーブや交差点が多数あり、こうした空間の変化点や角地の多くに高木の樹木が配置され、印象的な景観が形成されていることから、歩行者の体験する緑を意図的に増やそうとする意識がみてとれる。

3) 隠し

建物の側面に植栽を配置することで、視界に入る建物等の人工物の面積を減じさせるとともに緑視率を上げ、緑量を感じさせる。地点A, D, E, H, I, Jのほか、黒川全体でみられるが、特に駐車場の周囲に多く認められる。中木、低木を合わせて配置することで建物を隠すケース、建物から30cm程度離して植樹されるケースが多数ある。また、高木の場合も建物に近づけて配置されることが多く、これにより枝が自然と空地側に伸び、緑によって包み込む印象を増幅させている。

4) 上下の組み合わせ

低木・中木・高木が上下方向で重ねて組み合わせられることで、緑

視率を上げるとともに、緑に包まれる様な圍繞感を増すのみならず、立体感のある景観を生む。特に、地面近傍の植栽が数多く認められ、庭園や公園のような印象を与えている。地点A-I, L, Mなどでみられ、IやKがその代表的なものであるが、黒川全体で見られる。高木と中低木の樹幹間距離は密で10-30cm程度が多い。

5) 不等辺三角形の樹幹配置

不等辺三角形上の樹木配置は、黒川温泉全体で確認でき、ヒアリングによっても意識的に行われていることを確認した。特に沿道では、道路に平行に配植するのみではなく、道路から奥まった箇所にも配植されることで、奥行きを形成し、単調な印象を与えていない。

上述した5つの技法は、図-3に示す通り、黒川温泉では至る所で用いられており、また、多くの場合これらの技法が複数組み合わせられていたことを確認した。以上の分析を通じて、黒川温泉においては、庭園に用いられる景観形成上の技術的方法が、沿道を中心とする街全体の修景デザインとして用いられていたことを明らかにした。

4. 結語

本研究では、黒川温泉を対象として雑木による修景の経緯とその技法に関する考察を行った。本研究の成果は以下の通りである。

1) 昭和半ばまでスギ林とわずかな桜しかなかった黒川温泉では、1986年以降の旅館組合発足により、当初3年は行政からの補助を得ながらも、それ以後は補助金に頼らず、入湯手形の収入を主な資金源として、旅館組合が捻出する独自の予算により修景を行ってきた。山間に位置する黒川温泉において、田舎の雰囲気をもつ雑木による修景は、温泉地の魅力向上と観光客の集客につながり、それが組合員にも十分に実感されたことで、継続的な仕組みの維持が可能となった。

2) 雑木植栽および景観形成の技術は、後藤哲也氏から黒川温泉全体に伝えられ、露天風呂の共有とともに、景観を共有する理念が徐々に育ち、植樹に加えて看板や建物の修景を含めた「風景づくりの原則」として、景観形成上の目標が共有されるに至った。後藤哲也という技術を持ったリーダーと、実行する主体(組合員)の存在、効果の発現とその持続が、継続的な修景の実現を可能にした。

3) 聞き取り調査と現地調査により、5つの雑木植栽による沿道景観形成上の技法を仮説的に見出し、これらを分析視点として黒川温泉における樹木配置の景観形成上の特徴について考察した。視覚上の連続や奥行きを生む「つながり」や、自然な景観を演出する「不等辺三角形の樹幹配置」は、いずれも黒川温泉全域にお

いて認められたが、これらは実際に風景づくりにおいて強く意識されてきた景観形成の技法であった。視線の突き当たりに高木を配置することで緑を強く印象付ける「目当て」は、黒川温泉の道路の変化点を中心に多数認められた。また、樹木によって建物等を効果的に隠す「隠し」や、高さの異なる樹木を配置する「上下の組み合わせ」により、圍繞感や立体感ある眺めがつくられていた。多くの場合、これらの複数の技法が組み合わせられていた。これらの技法は、旅館の敷地内部や、単一の旅館のみに認められるのではなく、黒川温泉全域に共通の修景の技法として認められることを把握した。この事実は、黒川温泉の雑木植栽による修景が「黒川温泉一旅館」の考えに基づいて進められたことの証左となる。このように、黒川温泉では、旅館組合を基盤とする景観形成の主体が、自主財源を確保する仕組みと雑木植栽による修景の技術の双方を確立したことによって、修景事業の継続的展開と質の確保が可能であったといえる。

謝辞：本論文執筆にあたり、ランドスケープアーキテクトの徳永哲氏にはヒアリング調査や資料の提供など、多くのご支援とご協力を頂いた。また、後藤健吾氏、穴井信介氏、松崎郁洋氏をはじめ、黒川温泉観光旅館協同組合の皆様には、ヒアリング調査のご協力を頂いた。ここに記して厚く謝意を表す。

補注及び引用文献

- 1) 岡島直方 (1997)：同時代の文化的背景から見た萌芽期の雑木の庭についての一解釈 近代日本文学・絵画と飯田十基の動き：日本建築学会計画系論文集 500, 79-86
- 2) 鈴木博之 (2013)：庭師小川治兵衛とその時代：東京大学出版会
- 3) 尼崎博正 (2012)：七代目小川治兵衛：ミネルヴァ書房
- 4) 岡島直方 (2011)：上原敬二による庭園樹木としての雑木に対する評価の形成：ランドスケープ研究 74(5), 399-404
- 5) 小形純一 (1997)：飯田十基 雑木の庭の創始者：ランドスケープ研究 61(1), 1-4
- 6) 岡島直方 (1997)：近代における雑木の庭の発祥に関する研究 飯田十基の動きを中心にして：千葉大学博士論文
- 7) 遠藤裕志, 山田宏之 (2008)：街路樹のある街路空間における現地・スライド評価実験による心理評価の比較研究：ランドスケープ研究 71(5), 675-678
- 8) 青木陽二 (1987)：視野の広がりりと緑量感の関連：造園雑誌 51(1), 1-10
- 9) 増田昇, 下村泰彦, 安部大就 (1989)：都市景観形成に係る街路緑化手法に関する研究：造園雑誌 52(5), 318-323
- 10) 濱野周泰, 麻生恵, 北沢清 (1987)：モデルスコープシステムによる街路樹の植栽パターンの分析について：造園雑誌 50(5), 137-142
- 11) 阿部伸太, 荻茂寿太郎 (1999)：風致宅地を規定する接道部植栽デザインの研究：ランドスケープ研究 62(5), 765-768
- 12) 下村泰彦, 増田昇, 山本聡, 安部大就, 田村省二 (1992)：フォトモニター法を用いた街路修景・緑化手法に関する研究：造園雑誌 55(5), 289-294
- 13) 熊本日日新聞情報文化センター (2000)：黒川温泉「急成長」を読む：熊本日日新聞社
- 14) 松田忠徳 (2004)：黒川と湯布院：熊本日日新聞社
- 15) 龍居庭園研究所 (2002)：庭 146 黒川温泉の庭：建築資料研究社
- 16) 後藤哲也 (2005)：黒川温泉のドン 後藤哲也の「再生」の法則：朝日新聞社
- 17) 後藤哲也, 松田忠徳 (2005)：黒川温泉 観光経営講座：光文社
- 18) 黒川温泉自治会, 黒川温泉観光協会, 黒川温泉観光旅館協同組合, 株式会社エステイ環境設計研究所 (2007)：黒川温泉の風景づくり：株式会社エステイ環境設計研究所
- 19) 黒川温泉観光旅館協同組合 (2012)：黒川温泉観光旅館協同組合設立 50 周年記念誌：黒川温泉観光旅館協同組合
- 20) ヒアリング調査は 2016 年 12 月 22-23 日, 2017 年 9 月 4 日に実施した。また, 2017 年 1 月 16, 31 日にメール, 1 月 26 日に電話による事実確認を行った。
- 21) 前掲 15), p.87
- 22) 前掲 16), p.57
- 23) 前掲 13), p.84

- 24) 一つ購入すると宿泊せずとも 3 箇所の露天風呂に入浴できるというチケット。来訪客は旅館の隔たりを感じずに露天風呂めぐりが可能になる。
- 25) 穴井信介氏へのヒアリングによる (2016.12.22)
- 26) 黒川温泉 2016 年度視察資料 (黒川温泉観光旅館協同組合) より作成
- 27) 前掲 16), p.99
- 28) 前掲 18), p.2
- 29) 前掲 18), p.25
- 30) 徳永哲氏へのヒアリングによる (2016.12.23)
- 31) 前掲 15), p.75
- 32) 後藤健吾氏へのヒアリングによる (2016.1.26)
- 33) 前掲 18), p.2
- 34) 前掲 16), p.94
- 35) 前掲 15), p.89
- 36) 後藤健吾氏へのヒアリングによる (2016.12.22)
- 37) ゼンリン住宅地図 (縮尺 1/1500) を元に筆者作図
- 38) 前掲 36)